

平成25年度購入文化財一覧

【九州国立博物館】(計14件)

- 1 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本著色病草紙断簡 (痣のある女)
 (しほんちやくしよくやまいのそうしだんかん
 あざのあるおんな)
- 指 定
 ○作 者 等
 ○時 代 平安-鎌倉時代・12世紀
 ○品 質 紙本著色
 ○員 数 1面
 ○寸 法 等 縦 25.9cm 横 45.3cm
 ○作品概要 痣というのは誰しもあるもので、見えない部分にあれば苦しみはないが、顔などにあると人と交わることもできず、不都合であるという。絵を見ると、豪華な衣装を身に着けた女性が痣のある自分の顔を見つめ鬱々とした表情を浮かべている。その顔貌や衣文などは、「地獄草紙」(国宝、東京国立博物館所蔵)や「餓鬼草紙」(国宝、京都国立博物館所蔵)にきわめて近く、画家の卓越した描写力が見てとれる。これらは12世紀末に後白河法皇(1127-92)のもとで活躍した宮廷絵師・常盤光長の制作と考えられていることから、本図も同時期に後白河法皇や光長の関与により制作されたものと推測される。平安時代を代表する優品。
- 来 歴
 ○購入金額 280,000,000円(平成25年度第1回鑑査会議)



- 2 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 絹本著色摩尼誕生図
 (けんぼんちやくしよくまにたんじょうず)
- 指 定
 ○作 者 等
 ○時 代 中国 元時代末-明時代初・14世紀
 ○品 質 絹本著色
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 縦 35.6cm 横 56.9cm
 ○作品概要 マニ教の開祖・マニの誕生の様子を描く。3世紀、ペルシアに生まれたマニが創始したマニ教は、ユーラシア大陸全域に広がり、その影響は中国・唐にも及んだ。中国では、仏教や道教に同化しながら布教を行った結果、思想的にも造形的にも仏教と混交した。本図は、仏教の開祖である釈迦の誕生を描いた、釈迦誕生図の図像に近似しており、仏教の影響が明らかに見てとれる。なお、その作風から、寧波周辺で描かれた仏画(寧波仏画)と多くの共通点が認められ、制作年代については元時代末から明時代初と推測される。数少ないマニ教絵画の一作例として、また、当該期の思想的、造形的な文化交流のあとを示す意義深い作例といえる。
- 来 歴
 ○購入金額 25,000,000円(平成25年度第1回鑑査会議)



- 3 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本著色隠元隆琦像 喜多元規筆 隠元隆琦賛
 (しほんちやくしよくいんげんりゅうきざう
 きたげんきひつ いんげんりゅうきさん)
- 指 定
 ○作 者 等 喜多元規筆 隠元隆琦賛
 ○時 代 江戸時代・寛文11年(1671)賛
 ○品 質 紙本著色
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 縦 119.3cm 横 48.8cm
 ○作品概要 隠元隆琦(1592-1673)80歳の姿を描いた、喜多元規(生没年不詳)初期の新出作例である。



隠元隆琦は、福建省福州出身の禅僧。興福寺住持・逸然性融(1601-1668)らの招きに応じて承応3年(1654)に長崎に来航し、日本における臨済宗黄檗派(現・黄檗宗)の開祖となった。本図は、黄檗宗の肖像画通有の写実性を備えた、典型的な作例である。

筆者の喜多元規は、最も名の知れた黄檗肖像画家。200点余りの現存作例のうち、本作は、像主の生氣ある表情を細緻に描いた、画家前期、つまり寛文10年頃まで遡る可能性のある、出色の作品である。賛文は、隠元の語録に一致するものはないが、前半部分は『黄檗和尚扶桑語録』『宝蔵院の請』により制作された自賛像賛文と重複する。

○来歴

○購入金額 3,000,000円(平成25年度第1回鑑査会議)

4 ○種別 <絵画>
○名称 紙本著色虎図 熊斐筆
(しほんちやくしよくとらず ゆうひひつ)

○指定

○作者等 熊斐筆

○時代 江戸時代・宝暦12年(1762)

○品質 紙本著色

○員数 1幅

○寸法等 縦133.0cm 横47.6cm

○作品概要

力強い筆線で虎の迫力を見事に表した、熊斐(1712-1772)の基準作。熊斐は、長崎に来航した中国人画家・沈南蘋らに師事して、鮮麗な色の写実的な花鳥画を習得した。本作品においても、薄く藍を塗った背景などに南蘋風の表現が看取できるが、その一方で、虎には江戸以前からの伝統的な虎図や朝鮮絵画からの影響を考えるべきであろう。

その表現は細部に丁寧な彩色を施しながら、リズムカルで力強い筆線で虎の躍動感を生み出しており、熊斐作品のなかでも優れた出来映えを示す。また、熊斐には年記のある作品が少なく、それも宝暦4年(1754)前後に集中している。宝暦12年(1762)に描かれた本作は、画家の後半期の基準作であり、画風変遷を理解する上でも極めて貴重な作例である。



○来歴

○購入金額 13,020,000円(平成25年度第1回鑑査会議)

5 ○種別 <書跡>
○名称 紙本墨書月江正印墨蹟 識語
(しほんぼくしよげっこうしょういんぼくせき しきご)

○指定

○作者等 月江正印筆

○時代 元時代・至正3年(1343)

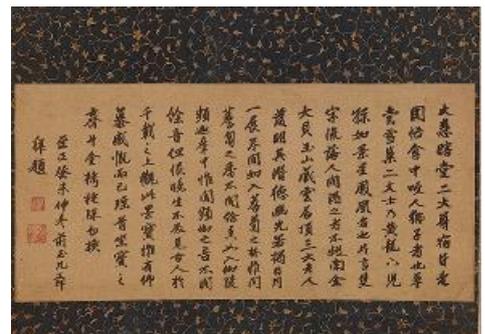
○品質 紙本墨書

○員数 1幅

○寸法等 縦35.5cm 横74.7cm

○作品概要

中国・元時代の禅僧として名高い月江正印(1267-1351)が、北宋の大慧宗杲を筆頭に南宋の癡絶道冲らに至る、今は亡き禅僧たちの遺墨集を拝見して執筆した識語である。高僧の遺墨に接し、仰慕の感慨を抱いたことを記す。その書は、素紙に松煙墨を用いて楷書体に近い謹厳な行書体で揮毫される。全16行。本紙奥に印章2顆(「沙門正印」「松月翁」)を捺す。表装は織部好みの掛幅装で、江戸時代中期に遡ると推考される。なお、重要文化財「雲峰妙高墨蹟 大慧墨蹟跋」(北村文華財団所蔵)は、本作品に遡る59年前に、同遺墨集を拝見した禅僧の雲峰妙高(1219-93)が記した識語で、先学により本作品との関連が指摘されている。日本から渡海した多くの禅僧が師と仰いだ月江正印の77歳の筆として貴重である。



○来歴

○購入金額 60,000,000円(平成25年度第1回鑑査会議)

- 6 ○種 別 <彫刻>
○名 称 女神坐像
(によしんざそう)

- 指 定
○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数
○寸 法 等
○作品概要

平安時代・12世紀

木造 彩色

1 軀

像高 40.7cm

後屏：高 60.8cm 幅 36.6cm 厚 1.6cm

牀座：幅 39.6cm 奥行 16.8cm 高 4.7cm

頭頂で髪束を蝶結びに結び、髪を左右に振り分け、長く背面に垂らす。大袖衣、鱧袖付き・襦袢、裳を着ける。両手は大袖衣の袖内に包み隠して拱手する(持物亡失)。後屏を背にして牀座(後補)上に坐す。ヒノキの一材から彫出し、両膝外側に別材を矧ぐ。胴長で像奥が薄い、膝張が狭いなど12世紀頃の神像の特徴が顕著である。面長で下膨れの顔に、目尻が吊り上がった半眼の目や上唇が突き出た口を表しており、神威に満ちている。当初のものと思われる後屏はヒノキの一材製で、屏面には山水が軽快に描かれており、平安後期の絵画資料としても貴重。なお、本像と面貌が近似する重要文化財「男神坐像」(個人所蔵、像高 50.9cm)もあり、一具だったと考えられる。

○来 歴

○購入金額 157,500,000円(平成25年度第1回鑑査会議)



7

- 種 別 <陶磁>
○名 称 色絵花鳥文六角壺(柿右衛門様式)
(いろえかちょうもんろっかくつぼ かきえもんようしき)

- 指 定
○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数
○寸 法 等

有田(伊万里)

江戸時代・17世紀後半

磁器

1 対

1. 口径 11.0×9.5cm 身高 31.8cm(総高 36.5cm) 底径 13.0×11.5cm

○作品概要 2. 口径 11.0×9.5cm 身高 32.0cm(総高 36.5cm) 底径 13.3×11.3cm

17世紀後半の西欧向け輸出用に伊万里(有田)で作られた柿右衛門様式の色絵磁器を代表する作品である。柿右衛門様式の色絵磁器を多数収集し、欧州におけるその流行の牽引役となったイングランド・スコットランド・アイルランド女王・メアリー2世(1662-94、在位 1689-94)の居城ハンプトン・コート宮殿に類似品が伝来することから「ハンプトン・コート壺」と呼ばれるタイプに属する。このタイプの壺は柿右衛門様式の中でもとりわけ評価が高く、その特徴は、濁手と呼ばれる乳白色の素地、板作り成形、輪郭線に黒と赤を使い分けること、素描の筆致が巧みなことにあり、柿右衛門窯(南川原山)の作品であると考えられる。

○来 歴

○購入金額 31,500,000円(平成25年度第1回鑑査会議)



- 8 ○種 別 <漆工>
○名 称 春字彫彩漆合子
(しゅんじちようさいしつごうす)

- 指 定
○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数
○寸 法 等
○作品概要

中国 明時代・16世紀

木製漆塗

1 合

径 35.5cm 高 12.7cm

さまざまな吉祥文を組み合わせて飾った大型の合子である。とりわけ「春」字が大きくあらわされるが、このように吉祥

文字や吉祥句を器物にあらわすことが盛んになるのは明時代・嘉靖年間(1522-66)からである。また、多色の漆を塗り重ねて薄めの堅い層をつくり、そこに細緻に文様を彫りあらわすのも嘉靖期彫彩漆にみられる典型的な特色であり、そのすぐれた作行から推して官営工房製の作品と考えてよい。同趣の作品としては「剔彩春壽寶盒」(「大明嘉靖年製」銘、台北・国立故宮博物院所蔵)があげられる。



○来歴
○購入金額 26,250,000円(平成25年度第2回鑑査会議)

- 9 ○種別 <染織>
○名称 茜地花丸花唐草文更紗
(あかねじはなまるはなからくさもんさらさ)
○指定
○作者等 インド・グジャラート地方
○時代 18世紀
○品質 木綿単糸平織。糸密度(経:Z・17本/cm 緯:Z・16本/cm)。片面染め、型染め、媒染。
○員数 1枚
○寸法等 縦259.0cm 横171.4cm
○作品概要 インド更紗。太い木綿糸を紡いで織った木綿2枚を接ぎ合わせた双幅の布一面に、木型捺染で花文様を基調とした幾何学文様と花唐草文様を充填した「鬼手更紗」である。主文は中心に置かれた大輪の多弁花を表した花丸文で、中央部四隅には主文の4分の1にあたる扇形を配す。縁回しには花唐草文がめぐらされている。裏面の一隅には「VOC」印、もう一隅には「24」の数字が捺されている。双幅の大きな木綿の中心に大輪の花丸文、中心区画の四隅に花丸文の4分の1形をそれぞれ配する鬼手更紗は、祇園祭南観音山見送り、祇園祭鯉山胴掛として日本に伝存しており、その用途においても儀礼用という本来のかたちを今に伝えている。



○来歴
○購入金額 5,500,000円(平成25年度第1回鑑査会議)

- 10 ○種別 <染織>
○名称 格子緋更紗間着
(こうしがすりさらさあいぎ)
○指定
○作者等 日本(仕立て) / インド・コロマンデル海岸(布地)
○時代 江戸時代・18-19世紀(仕立て) / 18世紀(布地)
○品質 木綿双糸斜子織。糸密度(双糸を1本として数えた場合。経:Z・18本/cm 緯:Z・18本/cm)。両面染め、描き染め、蠟防染。
○員数 1領
○寸法等 丈143.9cm 衿65.5cm 袖丈53.0cm
○作品概要 間着。現状は単衣だが、もとは袷仕立て。生地は紺糸と白糸の格子文様が中心部となり、周りは唐草文、房飾り様の火焰形花卉文を表した更紗。彦根更紗(東京国立博物館所蔵TI-392)中にも格子と更紗をあわせた類例が見られ、「緋手更紗」として知られる。格子部分を身頃や袖とし、更紗部分を、袖口、襟先、衿、裾にあてる。裏地が外れた状態で、衿は縫い代が解かれて広衿になっている。袖は袖下に丸みをつけた袂袖で、袖口を比較的広く取り(28cm)袖下を縫い詰める。袂の内側には身八つ口の開口部分をつくらない。両袖の袂の内側には本生地とは異なる方形の更紗裂(茜地鳥獸文更紗)を、襟の中心、腰部には単糸格子織の裂を縫い付けている。



○来歴
○購入金額 8,500,000円(平成25年度第1回鑑査会議)

- 11 ○種 別 <染色>
○名 称 紅型・琉球衣裳
(びんがた・りゅうきゅういしょう)

- 指 定
○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数
○寸 法 等
○作品概要

第二尚氏時代-大正時代・19-20世紀
苧麻、木綿、絹、平織、経緯緋、紅型(片面/両面)、先染、摺込捺染

本資料は明治38年(1905)から昭和4年(1929)に収集された琉球資料のうち、染織資料17領2枚。大きく分けて、①琉球・第二尚氏時代から明治期にかけて作られた紅型衣裳および裂、②琉球の王都・首里の織物衣裳、③明治期以降の八重山、宮古の衣裳から構成される。本資料のうち①紅型衣裳12領は、袖付や衿に一部改変や仕立ての変化が見られるが、多くは琉服の特徴を残している。白地両面紅型衣裳は、布地の質、染技術ともに優れ、首里の上級士族が着用した紅型衣裳であったと考えられる。紅型裂2枚は一度仕立てたものを解いた布地の一部。②朱地経縞衣裳1領は、芭蕉の芯から採取する極細の繊維を精練し染色した煮認め蕉で織られ、色系には絹が用いられる。③宮古、八重山の貢納布(上布)は、主に苧麻を原料とした布で絹糸のように艶やかで美しいことで知られる。男性物の着物3領は、宮古、八重山で製作された。琉球は廃藩置県に伴い、日本的な風習が急激に取り入れられる中で、衣裳形態も変化し和装化した。

- 来 歴
○購入金額

49,423,500円(平成25年度第3回鑑査会議)



- 12 ○種 別 <考古>
○名 称 伝三上山下古墳出土 獣帯鏡
(でんみかみやましたこふんしゅつど じゅうたいきょう)

- 指 定
○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数
○寸 法 等
○作品概要

重要美術品

古墳時代・6世紀

青銅鑄造

2面

1.径23.2cm 2.径22.4cm

鏡・銅鐸の収集家として知られる山川七左衛門旧蔵の資料で、明治23年近江野洲郡三上山下の古墳から出土したものとされる。主文様区に四葉座付乳を7個配置し、それにより分割された各区に半肉彫の獣形を配置する獣帯鏡で、直径約23cmを測る古墳時代後期の大型鏡である。2面の鏡は同じ型からつくられた、いわゆる同型鏡で、韓国百済武寧王陵や群馬県綿貫観音山古墳と同型であることが知られており、日本と百済との密接なつながりを物語る資料として重要である。なお、1面の鏡の鏡面には金銅製双魚佩の残片が付着している。これは国内において出土例が少ないものであり、被葬者像を考える上で貴重な研究資料である。

- 来 歴
○購入金額

15,000,000円(平成25年度第3回鑑査会議)



1(裏面に魚佩あり)



2



1(裏)

- 13 ○種 別 <歴史資料>
○名 称 紙本墨刷阿佐井野版医書大全
(しほんぼくさつあさいのばんいしよたいぜん)

- 指 定
○作 者 等
○時 代
○品 質
○員 数
○寸 法 等
○作品概要

熊宗立(均)著、阿佐井野宗瑞出版

室町時代・16世紀

紙本墨刷

10冊

縦26.9cm 横17.4cm

室町時代後期の医学においては、明の医学が尊重された。なかでも熊宗立(均)(1409-82)著『医書大全』は当時最新の中

国伝来の医学書の一つである。病気が明確に分類され、症状に応じた処方薬が記された便利な手引書であった。本書は、堺の商人・医師であった阿佐井野宗瑞(1473-1532)が明・正統11年(1446)に出版された原版『医書大全』を復刻出版したものの。日本で最初に印刷出版された医学書として著名である。『阿佐井野版医書大全』の初版発行は大永8年(1528)であるが、便利な手引書だったため、以後200年余りにわたり版を重ねた。本書は初版ではないが、中世末頃のものとして推定される。古典籍収集家として著名なフランク・ホーレー旧蔵。



○来歴
○購入金額 14,000,000円(平成25年度第1回鑑査会議)

14 ○種別 <歴史資料>
○名称 東大寺等関係文書
(とうだいじとうかんけいもんじょ)

○指定等
○作者等
○時代 卷子 平安時代・天曆8年(954)-長保4年(1002)
一紙文書(各) 平安時代・久安4年(1148)、鎌倉時代・宝治3年(1249)、文永8年(1271)

○品質 紙本墨書
○員数 1巻3通
○寸法等 卷子:縦29.1cm 横758.6cm
久安4年文書:縦32.2cm 横52.5cm
宝治3年文書:縦34.3cm 横53.0cm
文永8年文書:縦30.8cm 横52.7cm

○作品概要 卷子は、大和国添上郡檜中郷五条五里一坪(現在の奈良県天理市檜町に鎮座する檜神社付近)の土地を売買した際の売券16通を貼り継いだ手継証文。平安時代以降、土地を売買する際には、土地の権利が移動するたびに作成された証拠文書を貼り継いで、土地の所有権を示す証文とし、これを手継証文と称した。3通ある一紙文書のうち、久安4年(1148)文書は、興福寺東院の建物や荘園を信慶大法師が覚長大法師に譲る際に作成された譲状。宝治3年(1249)文書は能登国が納めた封物に対する東寺の受領書。文永8年(1271)文書は、比叡社の祭礼の御馬を飼うための米を借り進めるべきことを命じた文書。なお、紙背に聖經を書写する。



○来歴
○購入金額 35,000,000円(平成25年度第2回鑑査会議)